

『やまざと』 昨年号までに続いて、今回も、近年の外国での写真を紹介させていただきます。

その10-1：インドヒマラヤ・キナール谷からスピティ・ラホール、さらにラダックへー その前半のヒンドウ文化圏を

2016(平成 28)年の夏は、大英帝国時代の夏の首都・シムラーから北へ。酷乾のラダックと更にチベットにまたがるパンゴン・ツォー(湖)までを。文化も自然も異なる地域なので、まず、前半を。

旅はやはり、鉄道が楽しみです。ニューデリー駅には、実に様々な人たちが。妙齢の女性で入れ墨のようなのが見えたので見せて貰いましたら、今はボディペインティングの、民族の伝統との由。



インド国鉄は、駅構内も列車内でも治安に配慮で、安全です。カールカーで乗換えて、世界遺産指定の「シムラー鉄道」(狭軌、1903 年建設、標高差 1400m) でシムラーへ。右は、かつての有力者の邸宅をホテルにした Wood Vile Palace の支配人。英国紳士然たるお人柄で、ご好意により、翌早朝・食事前に、英国統治時代のシムラー総督府へお連れ頂きました。



総督府は、英国ヴィクトリア朝時代の繁栄を偲ばせる壮麗な建物。続いては、シムラーからキナール渓谷へ至る途上での、かつてのラージャ(藩王)・キナール王のパレスとその内部。さらに、ヒマラヤ山脈の中軸部を横切ることになりますが、右写真のように大渓谷中の急崖に穿かれた悪路連続。



キナール谷の中心地・カルパは、ヒンドウとチベット文化圏の混淆の地。ヒンドウ寺院の屋根越しに、雲上に僅かに覗く聖山・キナールカイラス。ここで初めてのチベット仏教寺院(ゴンパ)内部の仏様は、何となく異国風。辿ってきたサトレジ河を直上すれば、すぐ先はチベット(通境不可)ですが、左へ折れてスピティ谷へ。この続き、チベット文化圏での部分については、次ページで。



(一連の稿は、KUWV-OB会のHP中、「会報Web版」からご覧頂けますと、カラーでの閲覧が可能です。)

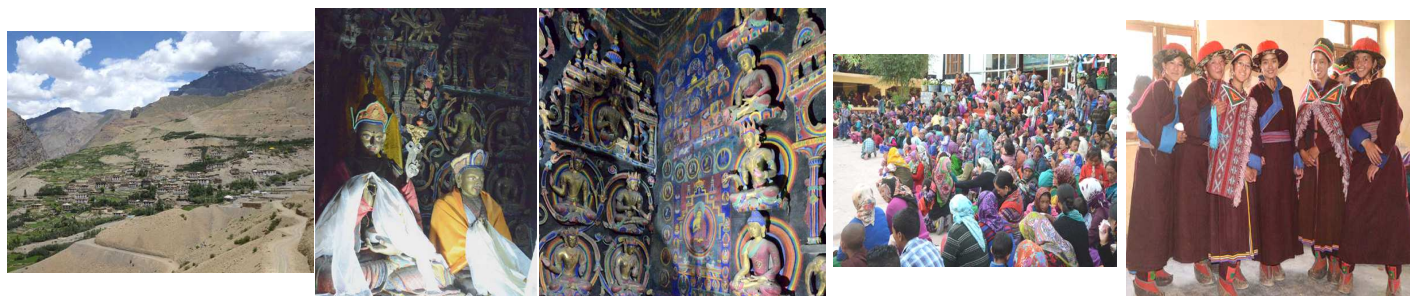
念のためのご説明：拙稿ページは、全部を筆者が作ったものです。今号からは、OB 会の現・収支状況のため、寄稿は個人4ページ・支部などは8ページ以内、写真は1ページにつき2枚までとお定めになりました。じつは、以前からですが、編集経費低減に少しは資するようにと、拙稿は上述のようにした上で PDF で提出している次第です。それゆえに、規定とは関わりなく、写真がたくさん掲出のページとなっております。HP 上でご覧頂く場合は、どうぞ拡大してご覧下さい。

その10-2: インドヒマラヤを越えて、ラダックへ — 前ページでのヒンドゥ文化圏から、チベット文化圏へ進んで

キナール地方から、ヒマラヤ主軸部を過ぎてスピティの谷に入れば、次第に緑が増えて、最初の大きな聚落のナコ村とナコ寺(「ゴンパ」と書くべきですが字数節減のために「寺」と。以下同じ)に。チベット仏教ですが、観音菩薩の面影はまだヒンドゥ風。次に、「ヒマラヤのアジャンタ」(素晴らしい壁画と仏像ゆえ)ともいわれるタボ寺へ。残念ながら堂内は撮影禁止ですが、入り口は写真可につき、その壁画を。



更に進んで、下写真右端に黄色の小さい屋根が見えてきたラルー寺(こちらも、タボ寺と同じく11世紀の大訳経官リンチェンサンポの創建)で初めて、ご好意により堂内撮影が許されました。暗闇の堂内には、壁画と見事な掛佛が。少し進んだクンリ寺に人だかりを見て入ってみれば、高僧の誕生日祝いを兼ねたお祭りでした。皆さんそれぞれ楽しげに、広場に出て踊りを披露。下は、踊りの出番をワクワクして待つ、娘さん達。



連日の好天です。谷が次第に広がったキィ村の朝。左下写真での右斜面に小さな白点で見えるのが、素晴らしい壁画と掛佛、立体曼荼羅で知られるキィ寺。撮影は、残念ながら内庭まででした。夕べには雲が払がりますが、雲間から陽が射す山肌は、地層とその褶曲模様が見事です。カザ村で。



次ページ冒頭では、クンザン・ラ(「ラ」は峠の意)4551m を越えて、ラホール谷へ。

その10-3: インドヒマラヤを越えて、ラダックへー ラダックから、更に僻遠のチベット・チャンタン高原へ

西欧からの人達やインドの人々には、我々には考え得ないような旅を愉しむ人達も見られます。クンザン・ラの前で見た、マウンテンバイク(荒野走行用の耐衝撃性能自転車)の、スイスからの夫婦と、フランスの娘さん。インドの人達は雨期で泥濘の悪路をものともせず、女性も。4500mを越える地域での雨は寒さが酷です。 右は、クンザン・ラを越えたラホールの谷の中心聚落・キーロン。



キナール・スピティ・ラホールと辿って来て、タグラン・ラ 5328m を越えれば、ラダックの地。ラダックへは谷の奥から入ることになり、最初はラダック最大のヘミス寺(左写真はその内庭)。続いて、チクセ寺やシェイ寺も。5年振りのラダックの主邑・レーですが、一段と綺麗な街になっていて、本通りは見事なカラー舗装に。しかし、立派な宝飾店の前でも、昔に変わらぬ人達が市場の店開きを。



ラダックの東方は、遙かチベットへと続くチャンタン高原の一角です。まず、タグラン・ラ 5328m の東方のツォ・モリリ(「ツォ」は「湖」の意)へ。その途上に、米国 AMS の 1954 年編纂 20 万分 1 図で、この近辺ではここだけの Salt (塩水湖の意: 地図入手時から気になっていた) とあるツォー・カルに。行って判ったのは、各所に熱塩水が噴出している(左下写真)ゆえでした。遙か僻遠の地のツォ・モリリは、湖面の青が実に綺麗な。お祭りにはラダックからも大勢の人が、とのコルゾック寺も閑散の。



最後に、ラダックの東、チャン・ラ 5360m を越えて、中国との国境係争のパンゴン・ツォーへも。その途上ではヤクが草を喰み、湖岸には祈りのタルチョーが風になびく地。湖水は驚くくらいに澄んで、ずっと先の湖中の石までが鮮明に。夢の中の様な心持ちのみが、今も、記憶の中にあります。



番外:昨号では、各地で華やかに催された「白山開山 1300 年祭」についての、講演予稿を載せて頂きました。今年は、神仏習合が今に続く五箇山白山宮の 33 年御開帳についての講演予稿を。

セッション IV

日本山岳文化学会 17 回大会 2019.11.16-17 一般講演
(東京慈恵会医科大学・高木会館 2 号館にて)

神仏習合の面影を今に残す五箇山白山宮「33 年御開帳・式年大祭」の報告

長岡正利

演者は本学会 2016 年大会で、天正年間の一向一揆や明治の廃仏毀釈を経ても現代に遺った白山信仰の諸仏(うち重文が 2 点)などを紹介した。また、昨 2018 年の本学会では、伝承に拠る白山開山(養老元年、越前の修験僧・泰澄)から 1300 年目(2017 年)に、福井・石川・岐阜県などの関係の各地で華やかに催された白山開山 1300 年祭のもようを紹介した。

古来の白山信仰(白山修験)は、天台密教系の、神仏習合のかたち(十一面観音菩薩を本地仏とし、その垂迹神が白山(妙理)大権現)であった。しかし、全国におけると同様に、慶応 4 (1868)年 3 月の神仏判然令(分離令)によって、神社と寺院の分離独立とその僧侶の還俗や、仏像を御神体とすること等も禁じられた。だが、一方では、五箇山の白山宮(富山県南砺市上梨)では、神社ではあるが、その「本尊」に「秘仏・十一面観音菩薩」があって、近年は 33 年ごとに開帳がおこなわれてきた。今年 5 月のそのもようを、多くの写真で紹介する。

この白山宮は、伝承に拠れば、白山開山の泰澄が人形山に白山菊理媛命を勧請・建立したものとわれ、後に現在の上梨聚落に移設して、文亀 2(1502)年に再建されたもの(棟札の記述による)で、国指定の重要文化財である。



白山宮の鳥居前には御開帳標札と、重文説明にもその旨が。



御開帳の早朝に、拝殿と本殿鞘堂の板戸を開放。右は、本殿正面上の、鎌倉初期の様式の蛙股。



御開帳が始まって、



五箇山各地から到着の獅子舞が、次々に奉納される。



拝殿では子供達によるこきりこ舞を奉納。



地域の人達が、正装で、次々に御開帳を拝観。右仮設で宝物展示。

開帳については、養老元(717)年の泰澄による創祀と伝わる平泉寺白山神社でも 33 年ごとに行われてきており、今回は 2025 年である。

一方では、若き日の泰澄が遙かに白山を望んで登峰・開山を志したと伝わる越知山大谷寺(福井県越前町大谷寺)での開帳は不定期(近年では 1940・55・66・72・87・2003 年)で、この 11 月 2・3・4 日に秘仏多数の開扉が予定されている。

【文献】平泉澄編『泰澄和尚伝記』。白山神社蔵版(1953):『藝林』Vol.66-2(2018)に再録版あり
越中白山宮奉賛会『白山宮修理工事報告書』。同会(1954)
越中五箇山平村史編集委員会『越中五箇山平村史』上・下巻。平村(1985・1983)
越中五箇山筑子唄保存会編『こきりこーその由来と歴史ほか』。平村(2001)
平泉隆房「白山信仰をめぐる諸問題」、『藝林』Vol.66-1(2017)

上述の五箇山上梨は、高校生時代からのご縁の地でした。その例大祭は毎年です。皆様、どうぞお越しを。